

はじめの一步

—つながら暮らしを取り戻したい

丸山美子(湯久保宿代表)

● 檜原村住民になる

湯久保に移り住んで33年。檜原村暮らしは、23歳のとき生後9

か月の息子と夫の3人で檜原村教員住宅に移り住んだ。当時、誰一人知り合いはいなかった。陸の孤島とはこの事だと思つた。

それまでは足立区の商店街のある下町暮らしだった。一転して、公共

交通も店も病院も隣の家

までも見渡すところには

人気のない山間の湯久保

の暮らし、そして今40年

という年月を経て人々の

暮らし方を広く深く自分

なりに想像する力を得て

思いめぐらせることがあ

る。

● 子どもが主人公になる活動

教員住宅に移り住んで、9か月後に二男が誕

生(その5年後長女、6年後三男

が生まれ6人家族)して、共働き

で教員をしている人から誘われ

て地域の保育所をつくる運動に

参加した。しかしその運動に違

和感があった。働きやすくする

ための運動に、子どもをはぐく

む視点があまり見えなかったの

だ。子どもが大人の傍らに置か

れるのではなく主人公になれる

子どもたちの生活の場づくりが

本来の目的だろうと思つた。次

の世代を大事にしたいと実感し

た私の原点の一つである。

● 「ここも東京!？」

湯久保に初めて訪れた人々か

らは必ずと言っていいほど、この

言葉が飛び出る。

車で走るのも難しそうな急峻

な坂道を登らなければ家にたど

り着かない。病院や買い物に行

くのも目的地までの所要時間だ

けで2時間は考える。子どもた

ちの通学も、坂道の高低差が影響

して行きと帰りの所要時間は、お

よそ1時間の差がでる。急峻な

生活道歩くのは私たちにとつ

ては、ごく当たり前の日常だ。過

去を振り返って思い起こせば、さ

みしいと感じる時期もあった。

しかし、自治会を一つの単位で考

えると、その単位を構成する人た

ちは、いつも家族的な気遣いを

持つてそれぞれ生活してきた。

誰もが、互いに生活状況をよく理

解しあい、誰かが気遣つてくれて

いるという安心感がここにはあ

る。

● 生活を自分で組み立てる

檜原村には3000~4000年

も前の建築物が現存し、旅館業を

営んでいる家もあり、また、古い

家で自給自足に近い生活をして

いる人々もいる。すでに空き家

になってしまったところも多く

あるが、代々引き継がれて生活し

ている家もある。

ここでの生活は誰かに何かを

してもらおうとする考え方から

始まるのではなく、自分が何をす

べきか、という事から生活が組み

立てられていく。そして家族、

地域へとつながり、互いに自分の

個性を自覚して地域における役



饗野大豆を使って味噌麹をこねる

割を担い、支え合って地域社会を作っている。逆に言うと、すべての人がそれぞれの役割を持って参加しないと、地域社会が成り立たない生活環境でもある。公共の道路や、上下水道など日常的に使うライフライン管理や、医者や買い物への外出には、互いに呼びかけあい、助け合って事に当たっている。

自治会会合、春と夏の祭り、道直し、一斉清掃、消防訓練など、節目ふしめに顔を合わせそれぞれを気遣いあう。

● 伝えたい、丁寧な暮らし

今、私はわくわく、ドキドキしていることがある。

それは、檜原村の人々が、これまで丁寧に生活してきた暮らし。そのものが大変貴重で文化的価値のあるものだと思いついてきたこと、そのことを通して、その暮らしをともに守っていくこととする人々が多くいることだ。その価値を広く伝えていくためにどのように行動したらいいのか思

いめぐらしドキドキしている。私の歩んできた40年はその文化的価値を自然に学ばせ、多少でも身に付けさせてくれたのかもしれない。人に伝えたい、伝えなければならぬという使命感が私をわくわくさせているのかもしれない。

● 伝えるとりくみ

過疎と過密が共存している東京、その内陸唯一の村である檜原。そこにある木々や古民家、生業や食文化が渾然一体となって残ってきたことに価値がある。

東日本大震災後はその思いをさらに強くし、それらを次の世代へつなぐ貴重な文化として、大都會・東京の都心と過疎の山間の檜原村との比較の中で「地域性の違いから活動の意味を見出すことができる」を伝えたい。

その一つが「東京ひのはら地域協議会」以下、「協議会」の活動である。東京都のみならず日本全国の中でも協議会の活動エリアは、急峻な山間の地形に在りなが

ら、長い歴史を育んできた古民家が存在し、伝統的な貴重な文化が引き継がれている希な地域である。

● 古民家を活用する

文化を伝える仕組みの一つとして、歴史ある古民家を最大限利用している。

・活動拠点：交流の場として継続的に活用し、地域の社会的財産として復活を目指す（古民家調査、古文書の解説、古民家の掃除、古道具の手入れ、食の保存の知恵、地域生活者との交流）

・体験の場：調査と体験を通して家の造り、仕事の道具や食の保存の知恵などを学ぶ。地域固有の作物の栽培、収穫、調理、食事を通して研究復活体験をする。

・暮らしの六次産業：地域の歴史、文化、暮らし、産物を一体とした六次産業化を推進する。古民家を食

と暮らしの総合点と捉え、年間四季折々の生活の仕方の意味を体感できる空間を含めた地域ブランド化をデザインする。

（まるやま・よしこ＝足立区生まれ。湯久保に住んで40年。檜原村村議会議員を99年から15年まで4期務め、行政主導から住民主役の政治に変えるべきと訴え続ける。議員として、時に住民訴訟を起こすなどの活動もしてきた。15年4月、無投票が続いた村長選に出馬。現在は一般社団法人「湯久保宿」代表。）



ファームエイド・銀座のお国自慢コーナーで。左からエメさん(歌手)、開田泉さん、上田純士さん、筆者。